

京都大学	博士 (社会健康医学)	氏 名	村上 玄樹
論文題目	<b>Patient Perceived Priorities between Technical Skills and Interpersonal Skills: Their Influence on Correlates of Patient Satisfaction</b> (医師の診療技術と対人技術：患者の優先度が満足度の関連要因に及ぼす影響)		
(論文内容の要旨) <p>【背景・目的】患者特性と患者満足度との関連は従来から示されているが、研究間に一貫した関連は示されておらず、これらの研究結果の違いが生じる理由について検討した研究はほとんどない。また、理論的には、重要感の違い（例えば医療者の診療技術と対人技術のどちらを優先するか）が満足度の関連要因の違いを説明すると考えられるが、患者満足度については重要感を実証的に検討した研究はほとんどない。一方、診療の場面では個々の患者の価値観や重要感に合わせた個別の対応が必要であるものの、病院管理や政策の視点においては患者集団での傾向を把握し対応することも重要となる。そこで、本研究では、患者が医師の診療技術と対人技術のどちらを優先するかという患者の重要感に基づく患者群を作成し、入院に対する総合的な満足度の関連要因について患者群間の相違を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【方法】2007年に日本の5つの公立病院の退院患者2,341人を対象に、信頼性および妥当性ともに検証されている質問紙票を用いて調査を行った。CHAID分析を用い、変数間の相互作用を考慮して、対象者を重要感に関する患者群に分類した。そして患者群ごとに入院の総合的な満足度を目的変数として重回帰分析を行ない、満足度に関連する要因の相違について比較・検討した。</p> <p>【結果・考察】2,341人のうち1,305人(回答率55.7%)の回答があった。CHAID分析を行なった結果、第1段階では診療科で3群(内科系、小児科系、外科系)に分岐し、さらに外科系の患者群は手術の有無で2つに分岐した。そのうちの手術のある群は年齢により40-70代の群とそれ以外の年齢群の2つに分かれ、最終的に5つの患者群に分類された。手術のある患者では診療技術を重視し、手術のない患者では対人技術を重視するという従来研究の結果に対し、本研究では患者年齢と組み合わせることで、手術施行患者であっても対人技術を重視する患者群の存在や、手術が無くても診療技術を重視する群の存在を見出すことが可能となった。特に高齢の患者では手術の施行にもかかわらず対人技術を重視しており、医師以外の他職種の対応も重要であった。一方、手術がない患者であっても外科系の診療科で受診した患者は、診療技術を重視する傾向があり、医師の役割がより重要となっていた。また入院の総合的な患者満足度と医師への満足度は全患者群で共通して強く関連していた。その上で、内科などの患者群は対人技術を重視する傾向を持ち、小児科などの患者群は対人技術と診療技術の両方を重視する傾向を示しており、入院の総合的な患者満足度との関連要因においても、こうした各々の特徴を説明しうるものとなっていた。病院が入手済みの基本情報を用いて患者特性を示す変数の相互作用に基づき作成された患者群において、満足度の関連要因の相違は各群の重要感からみて妥当であると考えられた。従来の研究では、各変数を単体で用いて患者群を分類し、各々の満足度の状況を比較していたが、変数の相互作用まで含めての検討はほとんどなされてこなかった。今回、変数の相互作用に着目することで、従来研究で通常見られる変数単体を用いた患者分類の中には、異なる重要感を持ったサブグループが混在していることを示し、その構成割合の違いが満足度の関連要因の結果に影響を及ぼすことが示唆された。</p>			

<p>【結論】本研究では、年齢や診療科などの基本情報を用いて、患者の重要感の類似する患者群が作成できることを示した。そして患者満足度の関連要因についての過去の研究結果間の相違が、医師の技術特性に対する患者の優先度の違いによって説明できる可能性を示した。</p> <p>(論文審査の結果の要旨)          患者が医師の診療技術と対人技術のどちらを優先するかという重要感に基づいて患者を分類し、患者群間で入院に対する総合的な満足度の関連要因の相違を検討することを目的とした。          2007年に日本の5公立病院の退院患者を対象に質問紙調査を行い、1145名から回答を得た(有効回答率49%)。CHAID分析にて対象者を重要感に関する患者群に分類し、各群で総合的な満足度を目的変数医師等の各医療メンバーや入院環境への満足度を説明変数とする重回帰分析を実施した。          CHAID分析の結果、患者は年齢や診療科などの基本情報により重要感の異なる5群に分類された。そして、手術を受けた40-70歳代の患者群は診療技術を最も重視し、総合的な満足度との関連では医師への満足度が重要であることが示された。一方、内科を中心とする群は対人技術を、小児科を中心とする群は対人技術と診療技術の両方を重視する傾向を示し、総合的な満足度との関連要因においてもこうした各々の特徴を説明しうるものとなった。          このように、本研究は、年齢や診療科など複数の変数の組合せを考慮したことで、患者集団の中には、重要感を異にしかつ満足度の構造が異なる患者群が混在することを示すとともに、患者満足度の関連要因についての過去の研究間の食い違いが、医師の技術特性に対する患者の重要感の違いによって説明できる可能性を示すという、病院管理学上重要な知見を明らかにした。          したがって、本論文は博士(社会健康医学)の学位論文として価値あるものと認める。なお本学位授与申請者は、平成21年1月29日実施の論文内容とそれに関連した学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。</p>
要旨公開可能日：                      年           月           日 以降